こんなところに仏教用語

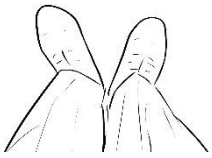
身近な仏教用語を紹介しています。

脚下照顧（きゃっかしょうこ）

最近転ぶようになったということはありませんか。そのような方は、大いにして自分の歩くイメージと実際の足の動きが一致していないことが多いのです。思っている以上に足が上がっていないのです。上を見て歩くのではなく足元を見て歩きましょう。

今回ご紹介の脚下照顧は、足元を見よという意味で用いられます。禅宗のお寺にお参りをしますと玄関などで「脚下照顧」と書いた紙が貼ってあります。足元を見て、履物をそろえることを示唆しています。そこから、発展し、自分の姿を明らかに見ることができる第一歩だと教えます。

又、足元を見よという意味は、自分の足元を顕かに見よという事です。他人をとやかくいういいがちな私です。他人の事はよく見えるのに自分はよく見えていないのです。「あの人老けたわねー」と言う自分も同じだけ年を取っているのです。なかなか自分はそうは思わないのです。自己を問うのが仏教です。

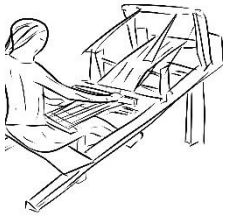


「何でカブトムシ死んじゃったの？」
「生まれてきたからさ」
古代人

経（きょう）

経が付く言葉は、あなたはどれぐらい浮かびますか。経緯、経験、経路他にもいろいろとあります。

おおむね上がってきた「経」には、「道すじ」という意味が当てはまるのではないでしょうか。経緯や経験はこれまで道すじのことであり、経路は目的地までの道すじであります。

語源は、古代インドのスートラです。経糸という意味があります。機織りを想像してください。まず、経糸を引いてから横糸を通しています。経糸がしっかりしていてこそ、横糸を通し編むことができるのです。そこから発展して、教えの要を短くまとめたものを「スートラ」と古代インドで表すようになりました。

お釈迦様がおられた頃も、口伝すなわち言葉で教えを伝えていました。ところが、お釈迦様が入滅されてから問題が起きました。お釈迦様は、相手に合わせて多種多様に伝え方を変えられました。教えを受けた人々はそれぞれ言われ方が違ったので齟齬が生じたのです。そこで幾度も会議がなされ、お釈迦様の言葉を確認し合い、文字として書き残すようになりました。これが現在我々が読むことができる「経」の原点なのです。